

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：42676

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520598

研究課題名(和文)ピア・レスポンスの何が文章の質的向上と評価結果に影響するのか

研究課題名(英文)What in the Peer Response activity affects the student performance and qualitative improvement in the writing class?

研究代表者

中尾 桂子 (NAKAO, Keiko)

大妻女子大学短期大学部・国文科・准教授

研究者番号：20419485

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ピア・レスポンスの実施が、文章表現や作文クラスの成績、本人の文章能力の向上に、どのように関係するかを見極めることを課題とした。その目的は、ピア・レスポンスの実施を、個々の担当者の活動だけではなく、コース全体の当為の活動として組み込むべきか検討すること、そのためのピア・レスポンス活動自体の位置づけを明確にすることにあった。

3年間の個々の検証を通して、活動は成績に直接影響しないが、学習動機に影響があることを確認した。さらに、初年次の言語教育として有益なピア・レスポンス活動のあり方、対面と非対面の性質の差とそれらの印象を確認したことで、初年次教育への当為活動としての位置づけを得た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to concern the benefit of the implementation of Peer Response activity in every class for the college freshman, referring to the student performance and qualitative improvement in the writing class.

Through individual verification for this three years, it was clarified that the Peer Response activities influence on learning motivation, but it was also confirmed that the activities do not affect the results and grades directly. Furthermore, we got a definition of the activities for the first year education, refer to the case studies of students consciousness and the difference of beneficial style of implementation, for information about the meaning between the properties of face-to-face response and non-face-to-face response.

研究分野：日本語教育

キーワード：ピア・レスポンス 文章表現 成績 統計 ICT 意識 協働学習 アカデミック・ライティング

## 1. 研究開始当初の背景

協働学習という理念を作文の推敲時に実施する活動に、ピア・レスポンスという学習方法がある。一般に、協働学習は、学習者主体の学びの場を形成するための活動で、昨今の基礎教育の段階で、分析力、考察力、参加当事者としての意欲の向上、責任感など、動機と意欲に影響の大きい活動だと認識され、様々な教育現場で導入されている。ただし、人間関係の構築をベースとする活動であるため、到達度を達成度に置き換えて評価する実習型の授業での効果には不明な点が多いものでもある。

学生の分析力、考察力、積極性といった学習動機を向上させ、後の学びの自律性を高める効果を期待し、初年次教育の文章表現、アカデミック・ライティングの指導に導入したいと考えたが、初年次教育の多くがアカデミックな環境での基礎的な約束事の達成度を評価する実習型の授業であるため、その導入効果や導入時の適切な方法を考える上での参照情報が少ないという問題があった。

## 2. 研究の目的

実習型の授業において協働学習の利点を最大限活かす方法、ならびに、協働学習により、成績にどのような影響があるかについて検証し、大学の初年次教育へのピア・レスポンスの導入の是非、可否、その効果的な方法について検討することを目的とした。

具体的には以下4点を確認することを通して、ピア・レスポンスの実施と学生の成績との関係、その必然性について考察することが目的であった。

- (1) ピア・レスポンスの活動が軌道に乗るためにはどのような学習パターンが見られるか(先行研究の追認・追従)
- (2) ピア・レスポンスのパターンをモデル化できるか
- (3) モデルは一般化できるか
- (4) モデル化した活動で授業を実施した場合、その効果として、成績との関係はどのようなものか

## 3. 研究の方法

以下の(1)～(3)の流れで留学生、日本人学生、日本人・留学生混在クラスにおいて、日本語学習寄り、日本語応用実習寄りなど、クラスの形態、目標に応じた様々な授業形態で、前期、後期のそれぞれの実践に対して、3年間、実施、分析、調整・修正を繰り返した。

- (1) 前期末に前期の実践を分析し、共同研究者間で報告と調整を行う。報告会では、授業でのピア・レスポンス導入法のモデル化について討論
- (2) 学期末の討論後に修正した実践モデルを次学期に試行し、再度、その期末に、ピア・レスポンスの状況を観察、分析

- (3) 学年末に前期、後期の実践を分析し、共同研究者間で報告と討論を行い、ピア・レスポンス実践法のモデル修正と調整

前期末、後期末の分析では、履修者別に、また、ピア・レスポンスの形態別に分析結果をまとめた。学生の意識については質的分析を行った。記述と成績の関係等文体に基づく調査では量的分析を実施した。

これは、前期後期2回、3年間で計6度の学期でのピア・レスポンス実践を分析することで、初年次教育への導入の有益なあり方、モデルを検討するものであった。

## 4. 研究成果

3年間の調査の結果、対面、非対面にかかわらず、実習型の作文クラスでの推敲時には、ピア・レスポンスのある程度のモデル化が可能であることが確認できた。また、同時に、ピア・レスポンスを記述の推敲時に導入することで、学生の記述、意識が質的に向上することが確認できた。

以下(1)～(3)の観点で成果の概要を示す。これらは、実践と微調整、3年間に発表した個々のケース・スタディーで確認した内容で、セクション5「主な発表論文、学会発表」に掲げる各論文を集約してまとめたものである。

### (1) 「文章表現」科目での実践モデル

「文章表現」の科目では、記述活動が主となるが、学生の多くが、日本人、留学生に関わらず、個人での「見直し」に困難を覚えていた。これに対応するために、実践当初、図1のような活動の流れを考えた。

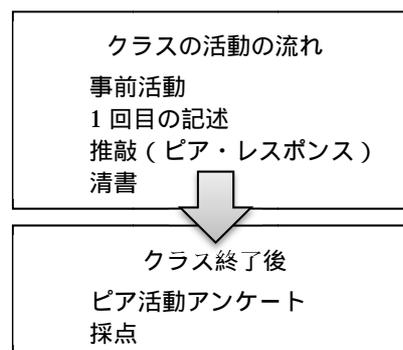


図1：開始当初の授業の流れ

初年度の平成24年度、前期、後期の実施後、「クラス内のピア・レスポンス活動の記録」、「記述の清書」、「クラス外に協力依頼したアンケートとポートフォリオ」、「清書の採点結果」を分析して、学期末に共同研究者と勉強会、討論、調整を重ね、授業の流れを修正した。そして、その次の学期の実践と分析の結果、さらに、修正、調整を繰り返し、最終的に、授業の流れを図2のように、また、ピア・レスポンスの活動を図3のように固定することで、展開や作業に混乱なく、効率的に推敲に入ることが2年目の終わりに確認で

きた。

その上、ピア・レスポンスの際にルーブリックを併用することで、質的に有効性を保ったまま、時間的な展開の効率化を図ることができた。

以上の確認を経て、3年目に図2、図3のモデルで授業を実践して、実践活動の様子を確認し、モデルとしての安定性を認めた。

以上は、セクション5の主要論文(1)、(7)、(8)、ならびに、(10)～(19)の分析をまとめたものである。

1. 前回の復習とフィードバック
2. その日の授業目標と着眼点を提示
3. クラス全体で例題実施
4. 着眼点+評価点を板書(ルーブリック)
5. 個人で応用練習を実施
6. ピア・レスポンス(3人で推敲)
7. 個人で完成後、提出
8. 授業の振り返り(ポートフォリオ)

図2: 修正・改編後の授業の流れ

<3人でピア・レスポンス>

1. 1人が記述の意図、工夫を他に説明
2. 各々の記述と「評価観点(ルーブリック)」との一致具合をピア間で批評
3. 各自の意図に合わせ、よりよい表現方法、表現の効果について意見交換

<気づきをメモ>クラスの活動の流れ

図3: ピア・レスポンスの流れ

## (2) ICTを利用した非対面ピア・レスポンスの有効性

ピア・レスポンスは、人間関係の構築の上で成り立つ協働学習ではあるが、SNSを優先度の高いコミュニケーション・ツールと認識する昨今の学生にとっては、非対面の場合によりコメントを述べやすい場合も多いという声も聞かれる。

また、一方で、ICTを利用した活動を取り入れられれば、協働学習の時間的コストの問題を軽減できる可能性がある。

そこで、非対面でのピア活動における学生の印象を分析、また、その活動の形態を調査した。

結果、対面式ピア・レスポンスと非対面式ピア・レスポンスは同様に機能するわけではないが、事前に、対面式の協働活動で十分な人間関係が構築されている場合には、非対面での活動の方が時間外でもより活発になる場合も認められた。また、一度、関係性が構築されてしまえば、ピア・レスポンスの形態による差への違和感は、活動に大きく影響を与えないことが確認された。

したがって、対面式、非対面式、それぞれのピア・レスポンスの性質を考慮して、一定の条件下で利用する限りは、授業外でのピア・レスポンス活動も実施が可能であること

が認められたと考えられる。これは、人間関係構築のための時間的コストに対応する観点から見ると、有益な示唆だと言える。

以上は、セクション5の主要論文(2)～(4)、(9)、(20)をまとめたものである。

## (3) 成績とピア・レスポンスの関係

ピア・レスポンス活動の条件と成績との関係を検定したところ、成績には、対面式、非対面式のそれぞれのピア・レスポンス活動、また、ピア・レスポンス活動の実施、非実施自体、影響していないことが明らかになった。

しかし、アンケート調査の結果からは、ピア・レスポンス活動を実施したクラスでの学習理解度、達成度に対する自信の大きさが、ピア・レスポンス活動を実施していないクラスの学生より大きいことが確認された。

つまり、ピア・レスポンスを実施する方が、学生の学びに対する個人の満足度が異なることが示唆されたという結果である。

成績には直接影響しないものの、学習の動機、学習に対する満足度には、ピア・レスポンス活動が影響すると考えられる。このことは、思考を深め、見直す目を養うこと、さらに、文章記述における自律性が高まることなど、学習の基礎となる力を固めることにつながる点が確認されたと言える。したがって、ピア・レスポンスと成績には間接的な影響があると結論づける。

以上は、セクション5の主要論文(5)、(6)ならびに、同セクション5の学会発表(1)～(6)、(8)をまとめたものである。

以上(1)～(3)の3つに分けてまとめたように、3年間のそれぞれの検証の下、到達目標が具体的、かつ、明確な達成基準のある初年次の授業においても、協働学習を組み込む余地、ならびに、協働学習の利点が認められ、そのモデルとなる方法を示すことができた。

もちろん、このためには入念なコースデザインを行うことが必要であるが、ピア・レスポンスを大学の初年次における基礎教育の中に当為の形で導入することの意義と方法を主張したい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 【雑誌論文】(計 20件)

- (1) 福岡寿美子(2015)「基礎演習クラスにおけるピア・レスポンス活動 日本人学生の場合」『流通科学大学教学支援センター紀要』第2号、流通科学大学教学支援センター、pp.13-23. 査読無
- (2) 原田三千代(2015)「『日本語表現』クラスにおける対話的相互作用の分析 - 対面・非対面の推敲活動から -」『三重大大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第35号 pp.47-52 査読無

- (3) 田中信之 (2015) 「コンピュータを媒介したピア・レスポンスの実践と評価 対面による活動との比較を通して」 『小出記念日本語教育研究会論文集』23号, pp.19-31. 査読無
- (4) 中尾桂子 (2015) 「学生の意識分析と人間関係への配慮の方法から見た非対面ピア・レスポンスの可能性」 大妻女子大学文系紀要 47, pp.1-20 (pp.133-152). 査読無
- (5) 中尾桂子 (2015) 「ピア・レスポンスと評価の関係 2014年度後期のライティング授業のケースから」 平成26年度統計数理研究所共同研究利用研究 共同研究リポート 『文体の統計分析』342, pp.51-69. 査読無
- (6) 中尾桂子 (2015) 「ピア・レスポンス導入後の期末レポートにみられる論文構成上の課題」 大妻国文 46, pp.1-27. 査読無
- (7) 福岡寿美子 (2014) 「日本語表現科目におけるピア・レスポンス レポートの分析を中心に」 『日本語教育論集』第23号, 姫路獨協大学大学院言語教育研究科, pp.41-48. 査読無
- (8) 中尾桂子 (2014) 「論文構成と述語動詞の章内出現数の関連 - 国文学論文と国文学生期末レポートにおける論述動詞の出現位置から -」 平成25年度統計数理研究所共同研究利用研究 『計量言語データ処理法研究 2』238, pp.86-112. 査読無
- (9) 浅津嘉之 (2013) 「非対面ピア・レスポンスにおける人間関係の構築と維持の特徴」 CAJLE Annual Conference Proceedings 2013, pp.11-19. 査読無
- (10) 中尾桂子・田中信之 (2013) 「ピア・レスポンス後の文章における「論述性」と「主観性」」 CAJLE Annual Conference Proceedings 2013, pp.172-181. 査読無
- (11) 原田三千代 (2013) 「教師の役割に対する態度構造の変容 日本語教育実習生のPAC分析から見えてくるもの」 CAJLE Annual Conference Proceedings 2013, pp.93-102. 査読無
- (12) 福岡寿美子 (2013) 「交換留学生と日本人学生によるピア・レスポンス 会話分析を中心に」 CAJLE Annual Conference Proceedings 2013, pp.55-61. 査読無
- (13) 原田三千代 (2013) 「協働学習に着目した教室活動と評価 日本語作文教育におけるピア・レスポンスを中心にして」 国際交流基金クアラルンプール・マラヤ大学共催第10回マレーシア日本語教育研究発表会 浦和研修報告会 PROCEEDINGS10, pp.1-11. 査読無
- (14) 原田三千代 (2013) 「大学院進学予備教育における持続可能性日本語教育の試み 『論文読解』の教室活動より」 桜美林言語教育論集 9, pp.35-49. 査読無
- (15) 福岡寿美子 (2013) 「日本人学生と交換留学生におけるピア・レスポンス」 『流通科学大学高等教育研究センター紀要』第10号, 流通科学大学高等教育研究センター, pp.1-14. 査読無
- (16) 福岡寿美子 (2013) 「交換留学生と日本人学生による日本事情クラスにおけるポートフォリオの分析」 『日本語教育論集』第22号, 姫路獨協大学大学院言語教育研究科, pp.25-32. 査読無
- (17) 中尾桂子 (2013) 「文系学術論文の論述表現: 研究者・日本人学生・留学生の比較」 平成24年度統計数理研究所共同研究利用研究 『計量言語データ処理法研究』(24-共研-2024) 290, pp.89-106. 査読無
- (18) 中尾桂子 (2013) 「文系短大生の学期末レポートの論文らしさ」 大妻女子大学国文学会 『大妻国文』44, pp.1-26. 査読無
- (19) 原田三千代 (2012) 「中国語母語話者留学生の研究に対する態度構造の分析 大学院進学予備教育における持続可能性日本語教育に向けて」 『桜美林言語教育論叢』第8号, pp.29-43. 査読無
- (20) 浅津喜之・田中信之・中尾桂子 (2012) 「学習者の意識分析から考える日本語作文授業における非対面ピア・レスポンスの可能性」 金沢大学人間社会環境研究科 『応用言語学研究論集』第5輯, pp.60-71. 査読無

#### 【学会発表】(計 27件)

- (1) 中尾桂子 「ピア・ラーニングにおける自主的な学習促進の要因」 第19回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウムポスター発表 (2015年8月27~29日予定, フランス: ボルドー大学)
- (2) 中尾桂子 「アカデミック・ライティングにおけるピア・レスポンスと評価の関係 2012年度~2014年度にかけての実践からコースデザインを再考する」 第19回カナダ日本語教育振興会 CAJLE2015ポスター発表 (2015年8月21・22日予定, 於 カナダ・バンクーバー: サイモンフレイザー大学ハーバーセンター)
- (3) 中尾桂子 「ピア・ラーニングにおける自主的な学習促進の要因」 第3回スペイン日本語教師会シンポジウムポスター発表 (2015年6月27・28日, スペイン: サンティアゴ・デ・コンポステラ大学北キャンパス)

- (4) 中尾桂子「成績に影響する学習条件とその効果—2014 年度後期のライティング授業のケースから—」統計数理研究所統計数理研究所言語系共同研究グループ合同発表会「言語研究と統計」(2015 年 3 月 23・24 日, 於 東京都: 統計数理研究所)
- (5) 原田三千代「Academic writing クラスにおける対話的相互作用の分析 対面・非対面の推敲活動から」第一回協働実践研究会台北支部国際研究会ポスター発表(2014 年 11 月 9 日, 於 台湾台北: 国際交流協会)
- (6) 福岡寿美子「ピア・レスポンス (Peer Response) における学習者の心理について 中国人留学生を中心に」日本質的心理学会第 11 回大会(2014 年 10 月 18・19 日, 於 愛媛県: 松山大学文京キャンパス)
- (7) 中尾桂子「学生の意識分析と人間関係への配慮の方法から見た非対面ピア・レスポンスの可能性」教育改革 ICT 戦略大会口頭発表(2014 年 9 月 5 日, 於 東京都: アルカディア市ヶ谷(私学会館))
- (8) 福岡寿美子「初年次教育の基礎演習でのレポート作成におけるピア・レスポンスの試み」日本リメディアル教育学会第 10 回全国大会(2014 年 8 月 20 日~22 日, 於 東京都: 東京電機大学千住キャンパス)
- (9) 中尾桂子「『論述』表現の章内出現数から見た学生レポートの課題—母語の論述スタイル, 指導方法, 指導内容のいずれの問題か—」世界日本語教育大会ポスター発表(2014 年 7 月 11~13 日, 於 オーストラリア: シドニー工科大学)
- (10) 浅津嘉之「非対面ピア・レスポンスにおける教師の役割 学習者の意識分析から」小出記念日本語教育研究会第 23 回大会ポスター発表(2014 年 7 月 5 日, 於 東京都: 国際基督教大学)
- (11) 中尾桂子「留学生に対するアカデミック・ライティング指導における課題—文系学術論文と文系留学生の期末レポートを比較して—」小出記念日本語教育研究会第 23 回大会ポスター発表(2014 年 7 月 5 日, 於 東京都: 国際基督教大学)
- (12) 原田三千代「大学院進学予備教育における批判的思考力の育成を目指して—反論練習を媒介にした L2 教室活動—」小出記念日本語教育研究会第 23 回大会ポスター発表(2014 年 7 月 5 日, 於 東京都: 国際基督教大学)
- (13) 田中信之「コンピュータを活用したピア・レスポンスの実践と評価 対面による活動との比較を通して」日本語教育学会 2014 春季大会(2014 年 5 月 31 日~6 月 1 日, 於 東京都: 創価大学)
- (14) 中尾桂子「『論述』動詞の章内出現数から見た学術論文と学生レポート」平成 25 年度統計数理研究所共同研究利用研究グループ合同発表会 言語と統計(2014 年 3 月 29・30 日, 於 東京都: 統計数理研究所)
- (15) 福岡寿美子「初年次教育の日本語表現科目としての基礎演習におけるピア・レスポンス 日本人学生のレポートの分析を中心に」日本語教育学会テーマ研究会アカデミック・ジャパニーズ・グループ(AJG)第 32 回研究会(2014 年 2 月 8 日, 於 東京都: 東京海洋大学品川キャンパス)
- (16) 原田三千代「協働学習に着目した教室活動と評価 日本語作文教育におけるピア・レスポンスを中心に」国際交流基金クアラルンプール・マラヤ大学共催第 10 回マレーシア日本語教育研究発表会浦和研修報告会招聘講演(2013 年 10 月 5・6 日, 於 マレーシアクアラルンプール: マラヤ大学)
- (17) 福岡寿美子「交換留学生とのピア・レスポンスにおける日本人学生の心理について インタビューを中心に」日本質的心理学会第 10 回大会(2013 年 8 月 30 日~9 月 1 日, 於 京都府: 立命館大学衣笠キャンパス)
- (18) 浅津嘉之「ICT を使った非対面ピア・レスポンスの試み」2013 年度第 6 回日本語教育学会研究集会関西地区(2013 年 8 月 30 日, 於 京都府: 京都外国語大学)
- (19) 浅津嘉之「非対面ピア・レスポンスにおける人間関係の構築と維持の特徴」カナダ日本語教育振興会 CAJLE2013 年次大会口頭発表(2013 年 8 月 22~24 日, 於 カナダトロント: トロント大学)
- (20) 中尾桂子・田中信之「ピア・レスポンス後の文章における「論理性」と「主観性」」カナダ日本語教育振興会 CAJLE2013 年次大会口頭発表(2013 年 8 月 22~24 日, 於 カナダトロント: トロント大学)
- (21) 福岡寿美子「交換留学生と日本人学生によるピア・レスポンス—会話分析を中心に—」カナダ日本語教育振興会 CAJLE2013 年次大会ポスター発表(2013 年 8 月 22~24 日, 於 カナダトロント: トロント大学)
- (22) 原田三千代「教師の役割に対する態度構造の変容—日本語教育実習生の PAC 分析から見えてくるもの—」カナダ日本語教育振興会 CAJLE2013 年次大会ポスター発表(2013 年 8 月 22~24 日, 於 カ

- ナダトロント：トロント大学)
- (23) 福岡寿美子「交換留学生と日本人学生におけるピア・レスポンス 作文プロダクトの分析を中心に」第22回小出記念日本語教育研究会(2013年6月8日, 於 東京都: 国際基督教大学)
- (24) 中尾桂子「論述表現から見た学術論文・院生論文・学生レポートの相違 コレスポンデンス分析・回帰分析・クラスター分析を比較して」平成24年度統計数理研究所共同研究利用研究グループ合同発表会<言語と統計>(2013年3月27-28日, 於 東京都: 統計数理研究所)
- (25) 中尾桂子「ピア・レスポンス導入授業の学期末レポートに見られた「論述」性と「主観」性」協働実践研究会第5回研究会(2013年3月23日, 於 東京都: 早稲田大学)
- (26) 原田三千代「ジャーナル・アプローチによる協働的教室活動に対するアセスメント 中国語母語話者学習者の事例研究より」ICJLE2012年世界日本語教育大会ポスター発表(2012年8月18日, 於 名古屋: 名古屋大学)
- (27) 中尾桂子「文系学術論文と文系留学生のレポートに見られるアカデミック性の違い」ICJLE2012年世界日本語教育大会ポスター発表(2012年8月18日, 於 名古屋: 名古屋大学)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等:  
公開サイトなし

科研報告書:

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)『ピア・レスポンスの何が文章の質的向上と評価結果に影響するのか』平成24年度~26年度 研究成果報告書 課題番号:24520598 研究代表者 大妻女子大学短期大学部 中尾桂子(2015年3月発行)

## 6. 研究組織

- (1)研究代表者  
中尾 桂子(NAKAO, Keiko)  
大妻女子大学短期大学部国文科・准教授  
研究者番号:20419485
- (2)研究分担者  
田中 信之(TANAKA, Nobuyuki)  
富山大学国際交流センター・准教授  
研究者番号:80288331
- 福岡 寿美子(FUKUOKA, Sumiko)  
流通科学大学商学部・教授  
研究者番号:60330487
- (3)連携研究者  
原田 三千代(HARATA, Michiyo)  
三重大学教育学部国語教育講座・特任講師  
研究者番号:50543211
- (4)研究協力者  
浅津 嘉之(ASAZU, Yoshiyuki)  
同志社大学 日本語・日本文化教育センター・嘱託講師  
研究者番号:なし